

ミスナラやカシワなどの広葉樹の落ち葉が厚く積もった林道は、足裏を包み込むように優しく押し返してくる。苫小牧東部工業地域(苫東)の北端、胆振管内安平町遠浅にある旧大島山林。2000年に90歳で亡くなった大島マツヨさんとお嫁さんの弘子さん(68)の森への思いが、伝わって来るかのようだ。

親せきの間でマツヨさんは「山のおばさん」と呼ばれた。遠浅自治会長の荒木徹会長(69)は「森に入るとよく怒られた」と懐かしがる。

### 山形から入植

11月下旬、苫東に残る森の活用を目指すNPO法人「苫東環境コモンズ」の事務局を務める草刈健さん(58)

## から森のたん破東苫

■上■ おばさんの山

# 曲折40年残った大木



旧大島山林内を散策する大島弘子さん(右)と荒木徹自治会長。落ち葉の厚みが豊かな森を象徴している

と、マツヨさんの姿を想像しながら、約80分の山林の中を歩いた。大島家の母屋跡地に、根元の直径が1.5メートルを超すドロの木があった。「苫東一の大木です」と草刈さん。大島家は1898年に山形県から入植。樹齢約100年の木は、入植時

から、苫東の移り変わりを見続けてきた。入植当時の面積は今の山林の4倍の約320畝。1973年発行の早来町史はこう記す。

「豚牧場として有名で、ナラなどの大木が多く、放牧された豚はドングリを食し、発育も極めて良好であった」

マツヨさんは3代目治雄さんのお嫁さん。子供に恵まれず、治雄さんのおいで、治義さん(05年、71歳で死去)を養子にもらった。その治義さんのもとに、同じ遠浅から弘子さんが嫁いできたのは

東京五輪のあった64年。弘子さんによると、「当時は豚はおらず、乳牛を林の中で放牧していた」。

この話を草刈さんに伝えると、「だから林相が明るかったんだ」と合点がいった様子。草刈さんは苫東の用地を一元取得した苫小牧東部開発(苫東開発)に76年に就職。以来、同社が破綻する98年まで緑地管理を担当した。「大島山林では、牛が余分な低木などを餌に食べてくれたのだらう」

### 開発へと売却

苫東では、約360戸の農家が苫東開発に

土地を売った。売却面積で5本の指に入る大島家が、母屋敷地も含め先祖伝来の土地を手放したのは72年ごろ。それから40年弱。企業誘致は進まず、苫東の総面積約1万7000畝のうち販売済みは約1千畝にとどまる。

破綻した苫東開発を引き継ぐ新会社苫東は道路や港湾を除いた約3200畝を緑地として残す方針。中でも、旧大島山林は昔の勇払原野の面影を残す貴重な場所である。

この森と周辺で今、新たな動きが生まれている。(編集委員の石川徹が担当します)

**発信**  
2009

国家プロジェクト・苫小牧東部開発の破綻で、皮肉にも豊かな自然が残った胆振管内安平町遠浅の旧大島山林。大島家から旧苫東開発に所有が移ってからも、まったく手付かずだったわけではない。

あずまや設置

遠浅地区の住民でつくる遠浅自治会(荒木徹会長)は苫東開発の許可を得て1995年から、約80畝の山林のうち、大島家の母屋跡の周辺の草刈りをし、地域の公園にしてきた。「搾乳した牛乳の缶を冷やしていた(大島弘子さん)という池のほとりには、あずまやを設け、林道は冬、歩くスキーコースになる。

から森のたん破東苫

■中■ 活用の試み 草刈り、育林住民が汗



苫東の森の案内人、草刈健さん(58)とスキーコースを歩いている。焼き窯のあとです」と、直径5m以上ある大きなくぼ地を見つけ

旧大島山林内で、管理のためのテープを木に巻く草刈さん。ドロノキの大木も残る

さん)。治義さんが亡くなる1年前のことだ。

した広葉樹の樹齢は60〜70年。草刈さんは、終戦前後に炭焼きに伐採された幹から新しい芽が育った。旧大島山林は産業遺産でもある。

旧大島山林内にも風倒木が目立つ。大半はこの台風18号による。全然朽ちていない。

頼もしい援軍

72年ごろに山林を手放した大島マツヨさんは養子の治義さん・弘子さん夫妻と、売却せずに済んだ隣接する畑の中に建てた新居に移住。畑の周りには北米産の成長の早いマツを植えたが、「2004年9月の台風18号で根こそぎ倒れた」(弘子

苫東開発を退職し、今は開発局の外郭団体・道開発協会で環境担当の研究員を務める草刈さんは、週末、苫東の別の地区の山林で、育林ボランティアを続けてきた。

旧大島山林が「仲人役」となり、血縁や地縁ではない新たな縁が生まれた。

た。壁穴住居跡のようだが、草刈さんは「炭焼き窯のあとです」と教えてくれた。ナラなど炭焼きに適

備したい考えだ。「でも、1人だと処理に10年かかる」。こう途方に暮れていた草刈さんに、援軍も現れた。荒れた森林の再生を目指すボランティアグループ「札幌ウッドアイズ」である。

会員は70人で、毎月2回、札幌周辺の人工林などの間伐作業を行っている。代表の河崎盟さん(68)は「うちの得意分野はチェーンソーを使った活動。来春から地域の人たちの活動をお手伝いできれば」と語る。

発信 2009

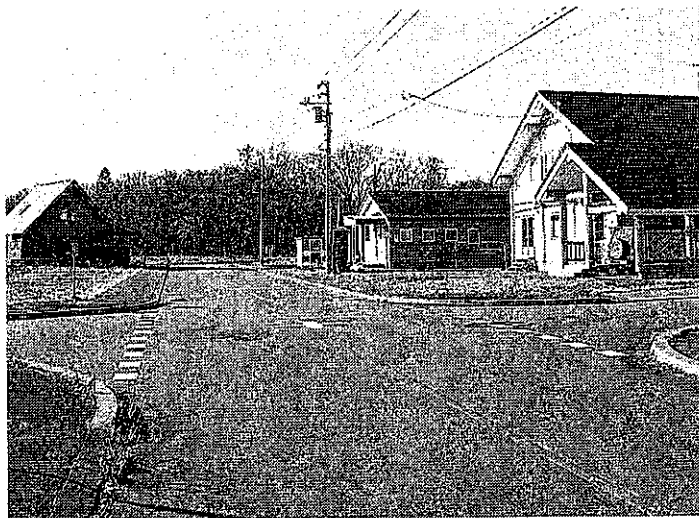
ログハウスの前には、ヤチタモの丸太が何本も転がっている。ログハウスの主は、苫小牧市立弥生中の英語教師、上村都志子さん。胆振管内安平町遠浅の旧大島山林に隣接する団地「アイリスタウン」の居住者第1号だ。

### 6割売却済み

同タウンの土地は、山林の旧所有者、大島マツヨさんが亡くなった後、治義さん・弘子さん夫妻とは別の親族が相続。町がそれを買収して2001年に分譲した。面積約5畝。平均330平方メートルの区画が68区画あり、すでに40区画が売れた。上村さんのヤチタモは、旧大島山林への入林許可を受けたNPO法人「苫東環境コモン

## ■下■ 新住民との交流

# 自然にひかれ移住増



## から森のたん破東苫

「ス」の草刈健さん(58)が11月末に処理した最初の風倒木。林の中からは、苫小牧の運送会社を定年退職し、今年

旧大島山林(写真奥)に隣接してあるアイリスタウン。6割が分譲済みで、しやれたログハウスなども建つ

### 市民農園人気

遠浅自治会の荒木徹会長(69)は、有志で「遠浅トレビアンクラブ」を結成。07年から、同タウンと旧大島山林の両方に接する弘子さんの自宅周辺の畑を借り、市民農園を開設。

苫小牧周辺で土地を探したが、目の前に森があつて毎日散歩できるここが気に入った。

2週間ほど、森を散策するという上村さんも「静かがいい」と語る一方で、「ここにはコミュニティがある」と、新住民同士や古くからの住民との交流に満足している。

新住民や苫小牧など都市住民との交流の深まりは、大島マツヨさん

の義理の娘である弘子さん(68)も実感している。

「知らない人が来るので最初は心配したけど、いまは寂しくなくていい」。来春向けに、堆肥が積まれた畑を自宅の窓越しに見ながら、弘子さんは表情を

緩めた。

遠浅は日本のチーズ専門工場の発祥地。マツヨさんは、山林内に住んでいたころは「母屋前の池でアヒルを飼っている。その卵を材料にパンを焼いていた」(弘子さん)。進取の精神は、遠浅に根ざしたのかもかもしれない。

アイリスタウン住民の上村さんは旧大島山林について、「地元の人が入り込んで散策できる森という点がいい」という。

身近に森のある暮らしの豊かさや大切さ。旧大島山林のある遠浅はそれを全道、全国に発信する場所になる可能性がある。

発信 2009